

5.30東災ボ2009年度総会

東災ボ参加団体の皆さんには、既にご案内を送付させていただきましたが、東京災害ボランティアネットワーク 2009年度総会の日程が確定いたしました。2009年5月30日(土)の午後(13:00~14:40)となっております。

数多くの会員団体が参加して下さっている東災ボですが、会員団体同士が交流を深める機会は多くはありません。年一回の総会ですが、是非この機会に多くの団体にとって交流の場になればと思っております。是非とも各団体で総会出席のご努力をいただければ幸いです。

恒例となっている総会記念講演ですが、総会後の15:00~16:00に、「関東大震災の被災者救援事業と賀川豊彦氏の仕事」と題し、(財)雲柱社「賀川豊彦記念 松沢資料館」の学芸員である杉浦秀典氏にお話いただく予定です。

表題にある賀川豊彦氏といえば、1923年の関東大震災時に、被災地の真ん中である「本所」地区を中心に拠点を構え

て被災者救援活動を実践した近代の災害ボランティア活動の礎を築いたといえる方です。

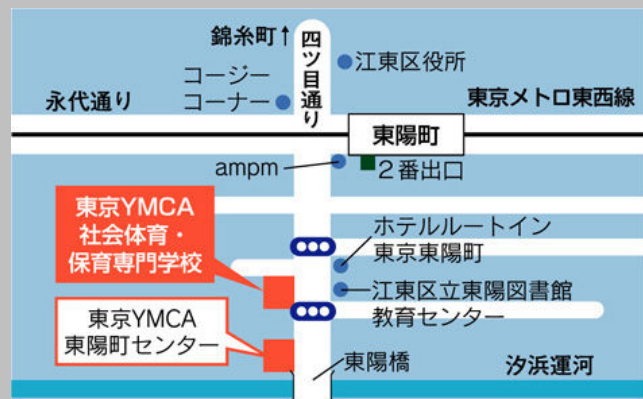
また、賀川氏は、災害ボランティア活動に留まらず、協同組合活動、労働組合活動、貧困者救済活動と多岐にわたっており、現代の私たちも学ぶべき点が多いと再評価されている社会活動家でもあります。2009年は、賀川氏が社会活動を始めてから100周年にあたるということもあり、賀川氏の活動を再検証・再評価する取り組みが、賀川氏の故郷である神戸と東京で多数予定されているようです。東災ボ総会と併せ、是非とも総会記念講演会にもご出席いただければと思います。

なお、東災ボ参加団体の皆さんには、総会の詳細について、後日、「出欠席のご案内」「委任状」とともに改めて送付させていただきます。その際は、出欠席票を返信いただくことになります。お手数をおかけいたしますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

東京災害ボランティアネットワーク 2009年度総会

日時：2009年5月30日(土)
総会 13:00~14:40
記念講演 15:00~16:00
場所：東京YMCA東陽町センター
内容：2008年度活動報告/2008年度財政報告/2009年度活動計画/2009年度予算案 など

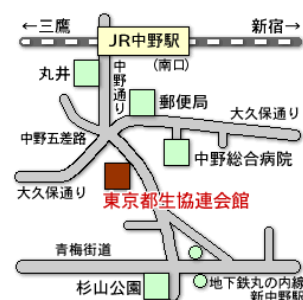
総会出欠席票・委任状などの詳細のご案内は後日
発送させていただきます。



東京都江東区東陽 2-2-20
地下鉄東西線「東陽町駅」徒歩5分

東京災害ボランティアネットワーク事務局

〒164-0011 中野区中央 5-41-18 東京都生協連会館 3階
tel:03-3380-1614 fax:03-3380-1615
E-mail:office@tosaibo.net



災害に学ぶ～ニューオーリンズと三宅島～ 4.18公開フォーラム報告

2009年4月18日(土)、千代田区神田駿河台にある明治大学駿河台校舎アカデミーコモン 3階の大会議室にニューオーリンズからの15名を招いて、「災害に学ぶ～ニューオーリンズと三宅島～プロジェクト」のメインプログラムである公開フォーラムが開催された。

会場には、ニューオーリンズで被災者復興支援に携わる米国人プロジェクト参加者15名の他、三宅島支援に関わった東災ボ関係者、三宅村長平野氏を含む日本人プロジェクト参加者8名、さらに一般公募参加者約200名、総勢200数十名もの参加者が集まった。

ハリケーン「カトリーナ」の被災は2005年8月、三宅島の帰島が始まったのは2005年2月。双方の災害から4年が経とうとしているにも関わらず、数多くの方が参加したことを考えると、その関心が薄れていないことを示しているのではないだろうか。三宅島・ニューオーリンズともに、復興の途上であり、お互いにその教訓を学びあう

公開フォーラムでは、東災ボ副代表でもあり、明治大学公共政策大学院教授でもある青山やすし氏が司会を務め、主にニューオーリンズでの復興状況と課題について米国人シンポジストから報告をいただく形でスタートした。

シンポジストには、ニューオーリンズ市の復興局長や住宅再建を支援している専門家、また、カトリーナ以降圧倒的に増加したホームレス支援活動家や農業支援・漁業支援を、青空市場を開催することによって実践している活動家、教育現場の復興支援に携わるチャータースクールの校長などある種の社会課題をテーマに活動している方々、さらに、地域コミュニティの再建(再生)を担っている神父やマイノリティと呼ばれる方々を地域で支援している活動家があり、報告は多岐にわたった。限られた時間の中での報告ということもあり、その全てを把握することは難しかったが、水害で1300人も死者を出してしまい、現在でも約1/3の住民がニューオーリンズ市内に帰っていない現状(27%が帰っていない)に対して必死に活動を行っている彼らの報告は身につまされるものばかりであった。

特に、マイノリティと呼ばれる方々への支援は、日本であれば「災害時要援護者支援」に通ずるものであり、ニューオーリンズの事例は私たちが学ばなければならない点が数多くあった。高齢者・障がい者はもとより、女性や子ども、さらに在日外国人やホームレスの方々への災害時・復興時の支援は、日本でも大きな課題となっている。緊急避難、避難生活、復興への道筋……。どれを取ってもマイノリティの方々

にとっては厳しい課題である。自身の経験を交えて語ってくれたサンドラ・リード氏は、「(マイノリティだけではないが)『住民自身の力』、そして『住民に寄り添って支援をして、力を引き出してくれる方』が必要ではないでしょうか」とメッセージを投げかけた。日本でも被災者本位の支援・被災者に寄り添う支援の必要性が指摘されているが、これはニューオーリンズでも同様のようだ。三宅島支援では、本当に多くの方が島民に寄り添い、支援を続けてきた。文化や習慣は違えど、そのスピリットは共有していきたい。

後半は、会場からの質問に対し、シンポジスト、および米国人関係者が答えていく形で進行した。

質問は、「金融危機が与える復興支援への影響」、「オバマ政権に代わってからの合衆国政府の対応の変化」、「住宅再建と公的支援の現状」「被災地外の災害ボランティアと被災者の関係性」「経済格差が与える復興格差」など数多く寄せられた。もちろん、現在進行形の課題もあり、歯切れの良い答えばかりではなかったが、シンポジストたちはその全てに可能な限り答えてくれた。

3時間あまりの公開フォーラムではあったが、本当に時間が足りず、もっともっと意見交換ができればお互いにとって得るものが大きかったのではないかと感じた。しかし、少ない時間の中でも、シンポジストと会場の参加者がお互いに学び合おうとする姿勢は、これからの復興支援、そして来たるべき災害時に必ず生きてくることを確信させた。

最後に、2008年5月から始まったこの日米プロジェクト。今回の来日プログラムで全てのプログラムが終了した。本プロジェクトに参加・協力してくださった全ての方々に厚く御礼申し上げたい。(福田)



写真上：公開フォーラムが終わった後のレセプションで関係者一同が集まった記念の一枚

コラム<TOSAIBO TIMES 編集長ハイバラのお言葉>

インフルエンザA型 (H1N1) 自己責任をまっとうしましょう。

予測していたよりも早く新型インフルエンザが発生しました。連日のマスコミ報道で、危機感と緊張感がテレビ画面にあふれています。スペイン風邪では4000万人の人が死亡したといわれています。第一次世界大戦の最中で、兵士の移動による感染もパンデミックの原因と言われています。今は世界がグローバル化し、当時よりも世界に感染が広がる度合いは強いでしょう。

東京の生協は対策本部を立ち上げ対策を強めています。東京都生協連も4月28日、対策調整室を設置し、東京都との連携を強め、会員生協に情報を提供しています。生協は購買生協のほか、医療、大学などの生協があり、もし日本で感染者が確認されると大変なことになります。

現在は、手洗いやうがい励行、特に咳エチケットを守るなど、個人の責任が強く求められています。行政や他人任せにせず、自分と周りの人をインフルエンザから守るためにお互いに責任を果たしましょう。今回は少しお説教調でスイマセン。(ハイバラ)

交流で感じた日米の「心のケア」、そして大切なこと

日米プロジェクト来日プログラム最終日となった4月19日は、アメリカ人・日本人それぞれの参加者が個別に参加するプログラムとなりました。私は、「三宅島被災者支援活動を通じて学ぶ、被災者を支える上で大切なもの」をテーマにしたプログラムに参加。三宅島、ニューオーリンズで被災者に最も寄り添って支援活動を展開した双方の意見交換プログラムです。

アメリカ人参加者はパトリシア・ジョーンズ（ローワー9th地区近隣エンパワメントネットワーク事務局長）、リンダ・ウスティン（スワンプ・リリー創設者）、キャシー・リードリンガー（チャータースクール校長）、フロゼル・ダニエルス（ルイジアナ災害復校財団理事長）、ベティ・ボーデン（ジャパソサエティ）の5名。日本人参加者は東災ボの参加団体を中心に14名が参加しました。

会場となった連合東京にて歓迎の挨拶の後、「三宅島島民支援活動」をスライドで報告しました。4年半の避難生活の中で一度も島に帰ることができなかった島民の気持ち、帰島したものの何から手を付けていいのかわからなくなってしまった島の高齢者たちのもとへボランティアが気持ちを寄せて活動してきたことなどを報告すると、アメリカ人参加者も涙する場面もありました。アメリカ人参加者からは、「失ってしまった痛みを一緒に悲しんでくれる人（ボランティア）の重要性とそのための時間が必要だということ」を三宅島の事例から改めて学んだ」というコメントが寄せられました。

ニューオーリンズでの被災者支援では、レッドテントと呼ばれる、特に女性の癒しの場を提供する活動を行っていることが報告がありました。この活動は、ニューオーリンズ地域の伝統的なコミュニティイベントであり、被災者の方々にとって馴染みの

ある場だそうです。特に、「社会や地域、コミュニティから見捨てられた」と感じてしまっていたアフリカ系アメリカ人の貧しいの方々にとっては、お互いに気持ちを通わせる場になりつつあるそうです。日本では「心のケア」と呼ばれる活動ではないのでしょうか。みやげじまく風の家>に近い場ではないかと感じました。

被災者同士のコミュニケーションの場を作り、気持ちを通わせながら次のステップを共有していく。洋の東西を問わず、被災者を支援する上で、この視点を決して忘れてはいけないのだと強く感じると共に、多様な人種・多様な文化を内包しているアメリカでの支援活動でも同じ視点で支援をしている方がおられるという事実に感銘を受け、そしてエールを送りたいと思いました。（連合東京 真島）



19日の「災害ボランティア」プログラム参加者。三宅島島民支援で災害ボランティアの象徴となった赤帽子をプレゼントした

三宅島訪問プログラムについて

三宅島訪問プログラムには、米国側メンバーからエスコフェリー氏、ンコシ氏、マッカーシ氏の3名、及びジャパソサエティのボーデン氏が参加した。19日（日）夜、竹芝桟橋を船で出発し、翌20日（月）の朝5時過ぎに島に到着すると、平野村長をはじめとする多くの方々が出迎えをして下さった。

1日半の滞在中、噴火による被災状況の視察とともに、島民の皆さんとの交流を行わせて頂く機会を得た。初日は、三宅中学校と三宅高等学校を訪問し生徒の皆さんとの交流を行った。また、夕方からは、村役場及び三宅支所の職員の方々や村議会

議員の方々との意見交換会を行い、その後の夕食会も含め、活発な意見交換がなされた。2日目は、お土産屋さんのご主人より避難中のお話を聞かせて頂く機会を得、また「風の家」では、スタッフと利用者の皆さんより、歓迎の島唄をご披露頂いた。

米国側の参加者からは、「ニューオーリンズに帰ったら、三宅島で経験した事、学ばせて頂いた事を、友人や同僚に話します。そして、次の災害への備えに活かしていきたいと思います」との発言があった。帰りの飛行機では、羽田に着くまでの間、ずっと三宅の話をしてきた。末筆ではあるが、関係者の皆様のご協力のご厚情により、実りあるプログラムとなったこと、御礼申し上げます。

（明治大学危機管理研究センター 研究員 佐々木一如）

災害に学ぶ～ニューオーリンズと三宅島～

日米プロジェクト来日プログラム

- | | |
|-------|---|
| 4月16日 | 米国人プロジェクト参加者来日 |
| 4月17日 | 墨田区水防施設見学
日本人プロジェクト参加者との意見交換会 |
| 4月18日 | 墨田区防災団地住民との意見交換会
公開フォーラム |
| 4月19日 | 個別プログラム
・「災害ボランティア」プログラム
・「ホームレス支援」プログラム
・「農業と産直システム」プログラム |
| 4月20日 | オプションプログラム |
| ～21日 | 三宅島訪問プログラム |
| 4月21日 | 米国人プロジェクト参加者順次離日 |



みやげじまく風の家>では、スタッフ・利用者、みんなでお出迎え

災害に学ぶ～ニューオーリンズと三宅島～ 来日プログラムを支えた仲間たち

◆ハリケーンによって膨大な数のホームレスが発生してしまったこともあり、ニューオーリンズのホームレス支援の方々が東京のホームレス支援について意見交換したいという要望があったため、19日の個別プログラムでふるさとの会の活動の見学とホームレスとの直接交流プログラムを実施。来日団からの積極的な質問が多く、「地域にあるさまざまな社会資源でホームレス支援をおこなっている」という理念が伝わりにくい面もあったが、隅田川沿いではホームレスと直接対話ができる場面もあり、とても刺激的なプログラムになったのではないかと。(成清：ふるさとの会)◆産業復興(特に農業・漁業復興)に携わっているメンバーが来日団にいたため、生協の農産物集積所へ見学に行くと共に、生協の農業従事者との関係、商品流通システムについて意見交換をするプログラムを実施。3つの個別プログラムの中では最も遠い場所になっていたため疲れたという話は聞いているが、日本生協連の協力もあり、とても良いプログラムになった。特に、農業従事者と生協が直接的に関係を持って取引しているシステムには興味を持っていただけたようだ。なお、私自身は市民活動交流のプログラムに参加していた。(藤野：東京都生協連)◆18日の墨田区の防災団地訪問、公開フォーラム、19日の市民活動交流プログラムと参加した。墨田区の防災団地訪問は、日本人でも勉強になるプログラムだった。両日を通じて感じたのは、19日の市民活動交流プログラムでも話題になった「災害文化の違い」だったように思う。市民が持っている災害に対する感覚のズレのようなものを感じた。(白鳥：SVA)

来日プログラム写真



左上写真：17日に開催した通称「円卓会議」。今回のプロジェクトに参加した米国人・日本人による意見交換会として開催された
中上写真：17日、18日と、墨田区を訪問し、様々な水防施設・防災施設を見学した。写真は白髭東団地の地下にある発電設備の一部
右上写真：荒川の水門を見学する参加者
左下写真：防災団地の住民との意見交換では活発な質問が行き交った
右下写真：水防施設だけではなく、街中の井戸なども見学した



なお、次号では来日プログラムについて詳細報告をする予定です。お楽しみに!

東京災害ボランティアネットワークとは?

1995年の阪神・淡路大震災を契機に、1998年1月に設立されたボランティアネットワーク。災害救援活動や防災・減災活動、ボランティア団体やNPO団体に限らず、様々な形で様々な課題に向かって活動している団体が、災害前に「顔の見える関係」を構築していくことを目的としている。構成されている団体は、ボランティア団体・NPO団体をはじめ、労働団体、消費者団体、社会福祉団体、海外支援NGO、企業と多岐にわたる。

これまで1998年福島豪雨災害や2000年三宅島噴火災害、2004年新潟水害、新潟県中越地震、2005年三宅島帰島支援など、様々な被災地で被災地支援活動・被災者支援活動を展開。

また、各被災地で気づかされたことを東京での防災・減災活動に生かし、都道府県行政、市区町村行政、社会福祉協議会、企業、そして地域の学校・町会などの地域団体と共に、災害といのちとくらしを想像して、考えて、実践していく小さな「気づき」の取り組みを実施している。

2008年7月現在80の団体が参加。

編集後記

先日、連合埼玉主催の第11回災害ボランティア研修会で『三宅島帰島支援における後方支援』について15分の時間をいただきました。2000年の噴火当時から2005年の帰島支援の話にたどり着いたときには15分の持分を使い切っていました。「肝心な話を要約しすぎて聴講している人には分からなかったのではないかと」「まだまだ修行が足りない」と反省しながら帰路に着きました。

仕事では、人前で話をする機会は当たり前であり、難しい会議もそれなりにこなしているつもりですが、今回は完全に準備不足!です。「まあなんとかかなるさ」と思ったのですが、やはりダメでしたね。『段取り八分仕事二分』。日々反省です。しかし、このような仕事以外で、人前で話をする機会を貰った上、自分のスキルを向上させて頂くなんて有難い話です。

ただ、自分は「根っからの後方支援(おいしい所取り)」のようで、困った時の長谷川さん!は、活動継続中ですので何かありましたら事務局経由でお声をお掛け下さい。出来る事には万難を排して駆けつけます。
来年50代になる長谷川でした。